

火星



平成18年2月号

七曜抄 (三)

山尾玉藻

四五軒の水に映れる冬景色

雪兆す伝言板に文字あふれ

尼寺の冬芽しづかに喰う鳥

木枯しのあとの川筋灯りある

十二月いつしんに松映す水

北吹くやガラス囲ひの牛井屋

梟に湯殿の音をこぼさざる

枯川に沿うてさざめきゆく少女

大いなる寄生木仰ぐ春著かな

一月の枝をつくせる大櫂

太白星

柳生千枝子

幼ナ子の髪つややかに冬に入る
冬川の銀の一線海へ注ぐ
夜寒さに夫の遣影を仰ぎをり
深き夜を敢えて凍星見に出づる
眩きかはた溜息か梟よ
小流れや寒き火星を頭上にす
冬といふ語感柔らか日記書く

杉浦典子

大仏の空の暮れそむ返り花
日まみれの電車涸川渡りけり

山峡の冬日あつめて鳥網張る
羽づくろひしてゐる鴨の水輪かな
神の水掬へばひびく威銃
赤松の根元あかるき十二月
綿虫の向うちちは話しをり

浜口高子

鷹差して鷹の消えたる指かな
枯葦の影と乗りたる舟畳
冬の日にはほのぼのとあり捨茶碗
それからのこと後まはし蕎麦湯吹く
直哉碑の辺に湯あたりの冬の草
本堂の畳のうねり柴焚火
眼もたぬうるめが山と積まれあり

火星作品

山尾玉藻選

ときどきは赤き実を踏む冬用意
大和郡山 城 孝子

平らなる夜の空よりむかご落つ

みささぎの水ひかりぬし七五三

葉ぼたんの山日ゆつくり集めをり

にうめんや眠れる山を越え来たる

川筋を変ふる砂積む秋つばめ
八幡 大山 文子

ふるさとは砂が顔打つ石路の花

掛軸のうしろに鳴れる冬の海

ねんねこや漁船波間に失せぬたり

枯芝を踏む音に寄る鯉の口

枯深し堰を越しぬる流砂音
宝塚 河崎 尚子

冬麗のうつちやつてあるうこん掘

神さぶる道の暗きを七五三

冬至かなみかん山から子等の声
 焚火して写真の私ねぢれゆく
 大いなる鳥の影おく白障子
 梟の夜は少年でぬたりけり
 はき慣れし靴のつやつや小鳥来る
 すれ違ふルビーの指輪枯野みち
 一山の枯を見てゐる枯蠟螂
 神鶏の鳥屋のほひや冬紅葉
 麦の芽を鳩の海風渡りけり
 神留守の摘まれし松のほひけり
 溜池のあれば豆柿落葉せる
 鶏の駆け回りをり留守詣
 菊月や折目吹かるる八手網
 草紅葉して峰火台平ら
 ポケットの拳うれしき落葉どき
 蟹宿へ潜る踏切ありにけり
 蟹宿の厠揺らせらる山陰線
 神戸深澤鱻
 宝塚山本耀子
 明石戸栗末廣

選のあとに

山尾 玉藻

いるのである。静寂故に聞こえる「流砂音」である。

平らなる夜の空よりむかご落つ

城 孝子

〈静かなる月夜も落葉屋根をうつ 篠田悌一郎〉が思い浮かんだが、「平らなる」に作者の独自性がある。「平らなる夜の空」は決して曇っているわけではない。昼間見ていた上天気を孝子さんはこう捉えたのである。「むかご落つ」は実景でなく虚の世界であろうが、実感として伝わってくる。

ふるさとは砂が顔打つ石路の花

大山 文子

文子さんの故郷は島根県の西方と聞く。それも海岸近くらしい。「砂が顔打つ」は厳しい風土を的確に捉えている。大陸からの冬の季節風が日本海を越え、海岸の砂を巻き上げるのである。そんな厳しい中であって「石路の花」がせめての優しさである。

枯深し堰を越しみる流砂音

河崎 尚子

この「堰」は山中の谷川などに設けられている砂防であろう。谷川の底そのものを覆っていた草が枯れ尽くし、その枯の中から水量の少ない水と共に砂が「堰を越し」流れ出して

大いなる鳥の影おく白障子

戸栗 末廣

〈雪に来て見事な鳥のだまり居る 石鼎〉〈雪の日の影の大きな枝の鳥 高明〉を連想したが、類句ではない。格調高く仕上がっており、一句としての句姿も美しい。景も明瞭に見えてくる。

鶏の駆け回りをり留守詣

山本 耀子

天理にある石上神宮の景であろう。神様が留守の間で詣でる人も少なく、「鶏」だけが「駆け回りをり」なのである。鶏の行為に対し面白さと哀れさが自ずと湧いてくる。

しばらくの没日の梁を冬の蜂

廣畑 忠明

蜂に限らず小動物の行動は人間には理解し難いことがよくある。没日の梁の上でしきりに蜂が脚や顎を動かしている。なにしろ蜂にとってもただの梁であり、何の意味も無いことをしているように見える。もしかして、ただの日向ぼこだったのかも知れない。間違いない「冬の蜂」の句である。(以下略)

恒星圈

岡 和絵

伊藤多恵子

加古みちよ

紀宮ご成婚ご懐妊あらば
帯解けの帯献上と鵞高音
大蕘の弓月庵の冬の柿
杖がつつきて環濠の辺の烏瓜
神鶏の尾を曳き駈くる七五三
まほろばの冬日大きく沈みけり

散策のくるぶしに来る秋の冷
ひとしきり落ちし木の葉のゆくへかな
犬の歩の進まぬ時を時雨来る
連山の影移りゆく冬紅葉
連山や十一月の日を溜めて

大山文子

加藤君子

定年の夫あり後の更衣
くちびるがなむあみだぶつ花八ツ手
マフラーより目の出て家庭教師かな
地獄絵へ足を早める冬の草
三輪山に神の戻れる日照雨

すひかづら今元気なり花こぼす
露草は何か欠けてるそんな人
木犀の花に寄らばや葉にすくむ
葉を落とし幹美しき夏椿
堺から手手かむ鱒半世紀

獅子座

山尾玉藻推薦

垣岡 暎子

雨だれの間遠となりし返り花
早駕籠のうすき草鞋や野紺菊
潮じめる巖よりたつ秋の蝶
豚汁の大湯気かぶる文化の日

鑿田たかゑ

補聴器の電池切れたる花野道
競馬場に落葉だまりや冬ざる
釜飯の炊きあがりたる紅葉山
干蒲団叩きて隣同士かな

中上 照代

葛湯吹く二人に言葉などいらぬ
柎に花びつしりと坂くだる
小春日や通院の傘杖代り
小春日の寄りて互ひに人違ひ

河崎 尚子

正倉院展出でてのひらに鹿の息
冬帽の赤がきれいな獣径
ベビーボーロ口にとけゆく木菟の夜
母とゐて同じ話と煮こごとりと

蘭定 かず子

酒樽に人の入りゆく冬ぬくし
いましがた雨のあがりし枯鶏頭
笹鳴や軒端に壺の干されあり
神農の虎揺らしゐる背広かな

山田 美恵子

蒸饅頭食うべてからよ地獄絵は
シヨーウインドウの靴煌めける神渡し
自転車のライトに山茶花零れけり
日を揺する風のまほらの白障子

加藤 廣子

卓袱台のみかんと並ぶグルコサミン
天高し馬糞一俵買ひにけり
山法師の実に触れゆける風の照り
焚火する浅瀬はさんで焚火かな